慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新出聖徳太子伝二種
Sub Title	
Author	牧野, 和夫(Makino, Kazuo)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1983
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.20 (1983.) ,p.393- 418
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000020-0393

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新出聖徳太子伝二種

牧野和夫

中世の聖徳太子信仰の隆盛の様は、これを書物に辿るときは陸続として生み出された太子伝記・注釈書の種類並びに伝本の多さを以て知ることができるが、伝記・注釈書類の中には、書名と若干の佚文を今に伝えて散佚したものは勿論、書名すら伝わることのない佚書もあったか、と思われる。延文五（一三六〇）年釈重懐撰『太子伝見聞記』に、

伝日記伝説分

人名也キ奇蹤ショウ書三巻　補闕記一巻　菩薩伝一巻作者思詫　思詫伝一巻鑒真和尚

廿人弟子随一也七代記橘寺在之云々　明一伝二巻伝教大師依憑此伝被載之云々　事略一巻作者不分明聖

障子絵ヲ記置名障子伝云々武天皇此伝云々　障子伝河内太子法隆寺広隆寺三ヶ所ノ伝聊有異説歟　松子伝松子ハ太子御在生人云々不流布間法隆寺之僧未見其本云々

失堕歟作者不知之云々　日本伝燈太子伝太子御入滅三百年以後也　平氏伝本一巻後代開為上下両巻一　旧事本記太子御製大方冊

……（略）……惣太子伝（雑カ）別ニ作者等十二伝在之云々

橘寺法空上人太子伝明匠新勘文此上人被撰集六巻相伝書本末分之十三巻也　同時鎌倉住仲範是又有明匠誉有上洛法空上人ト対面談義云々太子伝正流此両人近代明匠云々　拾遺集六巻　古今目録

抄此内一巻法隆寺ノ目六也世間流布云々　葛上郡万歳土居（トコノ）住能登房（ト）云物アリ平氏伝見開七巻ニ広注之ニ又十二巻在之広略二本

名能登伝（カト）一仮名マシリノ伝也此外秘伝口伝等秘決二巻口決二巻合四帖又在之自案立之題目多在之ニ謀説非一ニ仍非依憑本ニ云々

（内閣文庫蔵〔近世初〕写本一冊に拠る）

とあるが、引用最終行に認められる「能登ヵ伝」は、葛下郡万歳土居に住した能登房なる者の手に係る太子伝で、中世の万歳氏・当麻・熊野信仰等を併せ考える時、無限の興味を喚起せしめるものであるが、未だ伝本の報告をみない。重懐が「謀説非一ニ仍非依憑本ニ云々」と記していることは、逆に能登伝の看過しがたい流布の実際を

物語っている。後考に俟つべき伝記の一つであろう。能登伝とともに伝暦の末書に引用されること多く、しかも未だ伝本の報告をみない太子伝に、『見聞記』も記す「松子ノ伝」と呼称される一書がある。「非依憑本」と峻拒された「能登ヵ伝」に比して、太子存命中の人、大鳥部（父）松子の撰に係る権威ある伝記と信ぜられ来たった点は甚だ相違している。『見聞記』に拠れば、世間に流布せず、法隆寺僧もこれを披見しえなかったらしく、「失墜歟」とも記している。又、叡山文庫蔵〔享徳三・四年〕写『太子伝』にも「余秘之師弟子不伝親不見子空秘失ヘリ」とあり、その存否については、南北朝から室町にかけて既に疑わしい点があった、と思われる。鎌倉期に遡っても、書物として「松子ノ伝」が行われたかどうかは、不明である。西本願寺蔵徳治二年釈覚如写『上宮太子御記』一軸（斯道文庫蔵マイクロフィルムに拠る）は、本奥書に「正嘉元歳丁巳五月十一日書写之／愚禿親鸞八十五歳」とあり、親鸞八十五歳、正嘉元年（一二五七）に書写したことが伺えるが、『三宝絵』中巻の序と第一話「聖徳太子」を抄録、これに「日本記・平氏撰聖徳太子伝……」と出典注記を加え、次に佚書の釈珍海撰『日本三宝感通集』巻第一並びに太子御廟ノ註文出現ノ事を付加するものである。この『御記』の「太子御廟ノ註文出現ノ事」に「松子伝云」として「大慈大悲本誓願愍念有情如一子」に始まる、所謂廟崛偈を掲げるが、やや遡って成った法隆寺顕真撰『聖徳太子伝古今目録抄』も、「太子廟崛内石面自注記文松子写此令流布」として同様の廟崛偈を記し（荻野三七彦氏考定・昭和十二年刊本に拠る）、尊経閣蔵〔弘安九年〕写『聖徳伝大略抄出』も又、松子、崛内に入り親しくこれを見たとして廟崛偈を記す（斯道文庫蔵マイクロフィルムに拠る）。鎌倉中・後期には、「松子伝」は、廟崛偈に付随して名のみ存し、書物としての実際を知るものは殆どいなかった可能性もあろう。

しかし『古今目録抄』が「松子伝者或十巻或十二巻云々御廟内文者第十巻文云々」とも「或松子伝一巻云々」とも云い、「一巻伝云松子伝敏達天皇即位二年癸巳聖徳太子降誕云々」と記し、「松子伝云一巻伝ト」（文松子也太子之舎人也梵天化身云々）と記すところを見る

ならば、鎌倉期に、廟崛偈を録し、太子誕生の年を「癸巳」とする「松子伝」なる書の存した可能性もある。文保本系太子伝（文保年間成立）にも、数ケ所、「已上松子」の注記があり、文保本系太子伝撰述の際の資料として活用されていたか、とも推測しうるのである。又、室町期の注釈書『太子伝玉林抄』（飯田瑞穂氏編『法隆寺蔵尊英本太子伝玉林抄』昭和五十三年刊に拠る）に「仲云松子伝文云大日本国者雖辺卑小国ト神護地也汝等何等忽イルカセニシ神威ニ拒コハテ皇化ニ……」とあり、仲（範）云を信ずるならば、鎌倉佐介谷に住した南家の儒者仲範が「松子伝」を見ていたようであり、「松子伝」が鎌倉時代末期に極く少数の人士の目にのみふれて、秘説（深秘）と化していたことも考えられるのである。そうした所に、前述した如く南北朝・室町期に「失墜歟」「空ク秘シ失ヘリ」と存否に疑わしい目を向ける説の行われる原因もあったのであるが、一方で『聖徳太子伝拾遺抄』を始めとして諸末書・注釈書の多くが「松子伝云」或は「松子伝ニ見タリ」として、種々区々の異説を掲げるようになる。このことは、「太子ノ舎人」と信ぜられ「梵天化身」とまで伝説化した松子に、仮託した書物が繰り返し世間に行われていたらしいことを示すものと推しうるのである。

ここに紹介する二種の太子伝は、従来報告をみない大鳥部（文）松子撰と題した室町期の写本である。「聖徳法王三国伝燈灌頂伝」・「上宮太子御遺言記注」と内題は異なるものの、これらも又、中世に行われた一種の「松子伝」と云うべきであろう。

両書の書誌を簡単に記すならば、

一、久遠寺身延文庫蔵〔室町末期〕写『聖徳法王三国伝燈灌頂伝』大一冊。

表紙欠。寸法は、二八・二×十八・〇糎。仮綴、元は粘葉装か、と思われる。両面書。内題「聖徳法王三国伝燈灌頂伝一巻　大鳥部松子撰」。無辺無界、字高約二六・五糎、毎半葉八行、各行二八字内外字数不等、稀に一・二の点あり。十五丁・裏より下端に約二・〇糎幅の薄紙を横長に貼り、本文一・二字を丁寧に透写・補筆する。天地やや截断。後欠の可能性あり。五丁・表左下に蓮牌型

墨印（六・六×二・〇糎）「身延文庫」と。内容は、「竊恁上宮法王者即南岳大師之垂應」に始まり「為伝受子弟愚童不顧後賢嘲哢抄出秘決伝記是称上宮法王灌頂伝而已」と終る序に明らかな如く、種々の秘説・口伝の抄出であり、金沢文庫蔵〔鎌倉〕写『上宮菩薩秘伝』等の秘事・口伝に通ずるものであるが、『秘伝』に比して甚しく詳細である。廟崛偈も「一仏法伝垂跡結偈文」と標して、「欽明天皇聖観音」以下「甲斐駒馬頭尊」と甲斐駒に至るまでの本地仏を配し、「彼此各別皆方便……広済群生証妙覚」の八句を挾んで「大慈大悲本誓願」に続く特異な形式を示す。善光寺如来との往復書簡も又詳しい。『金沢文庫古文書』のなかに、聖教類の書名を挙げたものが見え、そのなかに、「太子灌頂伝事」という一項のあることが報告されているが（林幹弥氏『太子信仰』昭和四十七年刊）、本書は書名・内容からして、そうした「太子灌頂伝」に連なる貴重な一書と思われる。※（追記1）

二、南河内郡野中寺蔵〔応永三十年頃〕写『上宮太子御遺言記注』一軸。

縹色後補表紙（二七・四糎）、打付「上宮太子御遺言記註」と墨書。見返しは欝金色無地。総裏打。内題「上宮太子御遺言記注／大鳥部父松子撰」。無辺無界、字高約二三・七糎。朱墨両様の一・二点、竪点、送り仮名・訓み仮名等あり。朱はやや後筆か。八紙継（一紙幅約四五・〇糎、第八紙のみ、三七・五糎）。太子廿五・卅五・卅六・卅七・卅二・卅一の各歳・「恵慈法師日」とした一文の順に記し、第三紙本文末に「已上七大事畢」として、改めて順に太子卅・卅六・三歳等の記事を加え、「又日」として弘法大師の言を記す。引き続き「上宮太子御遺言記注相承」と題して、上宮太子に始まり、「慈円僧正——阿倍大臣大納言宿奈」等に至る血脈相承を記し、「当寺絵所阿倍大臣九代之子孫也」と注して了る。勿論、矛盾多いものである。奥書は「此七大事子孫一人令相伝但依有御器用御所望以別議奉授彼方就中御往生後者可有本所御返有御誓文云々／応永卅年癸卯六月廿九日　書写之畢／絵所上座覚慶（花押）」とある。巻首に重郭長方形墨印（三・九×一・八糎）「野中

寺」と。内容は、太子毎歳の記事の中より、数歳を選び、特に秘して「七大事」と称し、一子相伝をうたったものか。従って太子伝の諸末書に認めることのできない特異な内容を有しており注目される。「当寺」が何れの寺を指すかは不明である。覚慶も又未詳、後考を期したい。

※(追記2)

*

本稿の成るに際して、閲覧・翻印を御快諾下さいました身延文庫・野中寺各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

凡例

一、ここに翻字するものは、次の二本である。

『聖徳法王三国伝燈灌頂伝』〔室町末期〕写、大一冊
久遠寺蔵

『上宮太子御遺言記注』〔室町〕写、一軸、野中寺蔵

一、翻字に当り、次のような方針に従った。

1、漢字はなるべく正字体を使用するが、別字体・略体文字をも併用した。

2、虫損等による判読不明箇所は、□で示した。

3、重書等は※1・※2等として、後に一括して注記した。『灌頂伝』は、書誌に記した如く薄紙を貼り透写・補筆する箇所多く、特にこれを注記しなかった。

4、各丁の終りは」1オ・」1ウの如く示した。

5、『遺言記注』には朱墨両様の訓み仮名・音訓合符等が施されているが、本誌の制約上、音訓合符は省き、訓み仮名も、朱墨の区別はつけなかった。

聖徳法王三国伝燈灌頂伝一巻　　大鳥部松子撰

竊忸上宮法王者即南岳大師之垂応救世菩薩之変作彼勝鬘夫人
之来誕也夫四弘之船度四生之溺衆三明之光普耀照六趣之
癡闇矣
所謂在大唐衡山坐禅苦行不動身心而送九旬之一夏誦経論
談不合

眼目而経百日之夜隠是以陳隋両帝作為大師唐済帰為能化
故救世
菩薩之弘誓不唐捐故答三世之宿願任七生之加行終感和国
之幼生
為日域之化生奏讃西天之仏勧弘諸悪莫作之教法講渲東来
之妙法
普示捨邪帰正之正路終以建立四十六箇之伽藍即化度一千
三百之□」1オ
因茲慈雲広覆三千之含識徳光遠照六趣四生之迷類也其而
□七生行化東海三生之来誕彼此伝暦万枢而輙以難製記然
而
為伝受子弟愚童不顧後賢嘲哢抄出秘決伝記是称上宮法王
灌頂伝而已
聖徳太子胎内○其七月七夕語日[illegible] 秘釈云初阿
者
万法本来不生之義不生即発生機興即生之義也是則不動法
性本
来寂□(類カ)一切有情性徳正了因之三明之種子是也次阿者一切
衆生平
等建立慈悲修行円満之義理智冥合之種子也故尅七生於西
隣感
三生於東海也又初[illegible]者建立来化之弘誓非生現生之根源也
次[illegible]者」1ウ
説法利生之義又菩薩※1提涅槃之心地也後[illegible]者利益衆生之方
便
断悪修善之妙義也亦[illegible]者一切有情之心性五輪具足種子
次
[illegible]者修徳円満之躰能来所来之智徳也又同八月十五日夜言
[illegible](ササロロ)[illegible](云々)夫初[illegible]者即天人地之三才日月星之三光也後
[illegible]者
慈悲利物之善巧救世菩薩之心源也又[illegible]者一切衆生初生之
種子赤白
二滴之両子也後[illegible]者胎内五位之形質三十八転之能作五輪
円満之正義也故秘決
文云
毎月晦日　日月冥合　時時尅尅　不断冥合　是故天地

神祇冥合　寅夘辰□」2オ

午未申酉　戌亥子丑　二六神将　冥合時節　巨海満干

日月冥合　以具□

二有本源　産生衆類　故在生死　偏当年月　曜宿好悪

男女貴賤　貧富長命

果報勝劣　月初月終　初夜暁中　随節善悪　故撰好代

賢王治世　即以誕生

弘法大師尺云礼礼者天人地之三才定恵和合之義一仏二明

王自行化他之種子

也正正者一切衆生生死流転之義日月三光之躰也云々又秘

決云礼礼者日月

定恵者五行五蘊故貪破即日月也中五星者是五行也七星者※2

有四方惣

在二十八宿也日月転廻不断冥合産生我等也故十二宮者即

十二神也此

神将三返廻行即称三十六禽寅夘各々具三夘也云々故文云

是以法王」2ウ

日域誕生　待世待時　撰機求仁　誕生王宮　終果宿願

興隆正法　利益三界

或口伝云胎内生救生婆耶輪頭良波志記古土奈加良思面美

乃理野

加土於尾志彼良岐摩古度乃道入面仁仁　又云宇連思耶南世々

仁□毛※3

非師無津古土意於具良乃穂加毛嘉冥乃古利奈師　又云毛呂

喪

露乃与美思喜古度仁津加恵津々加多依乃阿志喜故度於奈

佐娑礼

伝教大師胎内胎外文尺云寅陽丑陰東方北方南浮東方四智

始此智亘□

三方皆只所謂一躰也喩自相坂関東月名東月自関西月如

云城月法界

円融方域在何所哉然則一切仏菩薩利生形者只弁才天也薬

師者□□」3オ

四智根源不動弁才天利物特尊也皆具陰陽故陽有陰〻有陽

云々

心有陰陽自在無窮也即心清時天陽心濁時地陰也心強盛時

陽也
男也心柔時陰也女也眼目開合遍身上下左右皆陰陽也故日
天子ハ
本命也月天子ハ元神也明星ハ自身也是以性徳不変真如之義故
定在左歟
陰女地母理ハ胎蜜性徳也恵ハ右陽男天父智ハ金顕修徳胎顕理徳
也云々

一仏法伝垂跡結偈文

欽明天皇聖観音　皇后小姉弥勒尊　敏達天皇薬師仏　推
古女帝即普賢
用明天皇宝生尊　間人皇女弥陀仏　崇峻天皇釈迦尊　皇
后倉橋薬王士」3ウ
聖徳救世観世音　后妃膳手大勢至　恵慈法師即文殊　摩
呂親王即日光
恩智千手観世音　川上大妃地蔵尊　博士学哥大世親　蘇
我□□〔大臣〕多聞天
大礼妹子持国天　大秦川勝増長天　檮美将軍広目天　調
使麻呂金剛□
甲斐黒駒馬頭尊　上宮王子二十五　即是二十五菩薩　孫
子八人八文殊
此外王后諸卿相　上下惣在二百余　彼此各別皆方便　本
迹同心現東海
惣現果躰数十身　正談本覚各無別　我身随類処々現　化
縁能尽帰西方
復有利縁速来化　広済群生証妙覚　大慈大悲本誓願　愍
念衆生如一子
是故方便従西方　誕生片州興正法　我身救世観世音　定
恵契女大勢」4オ
生育我身大悲母　西方教主弥陀尊　真如真実本一躰　一
躰現三同一身
片域化縁亦已尽　還帰西方我浄土　為度末世諸衆生　父
母所生血肉身
遺留勝地此廟崛　三骨一廟三尊位　過去七仏法輪処　大
乗相応功徳地
一度参詣離悪趣　決定往生極楽界
聖徳太子書此碑題文奉申合善光寺如来以彼善光善佐以下

氏人等以
墨筆紙可有御返書之書祈誓念願之間即経五更弥陀如来以[※4]由
自筆御
返報アリ氏人等大悦捧其返状奉献王城云々　其返状即般若
理趣経後偈文
善哉々々大薩埵　善哉々々大安楽　善哉々々摩訶衍　善
哉々々大智恵」4ウ
善能演説此法教　金剛修多羅加持　持此最勝教王者　一
切諸魔不能壊
得仏菩薩取勝位　於諸悉地当不久　一切如来及菩薩　共
作如是勝説□[※5]
為令持者悉成就　皆大歓喜信受行
又上宮太子七日別時念仏以此功徳奉申達弥陀如来
名号称揚七日已　此斯為報広大恩　仰願本師弥陀尊　助
我済度常護念

二月十四日　仏子勝鬘状

本師弥陀利生院衙
金仏如来御自筆返報云（運碑型印記一顆アリ）」5オ

一日念イ称揚無恩当息事イ　何況七日大功徳　我待衆生心無間　汝
能済度豈

二月十五日　大智門状

右聖徳太子七日別時念仏以此念仏三昧行業捧注札命巨勢
連奉□[※6]
念仏如来于時善光以下厥人等相議以墨筆硯紙槍置仏前令
祈請御返報之由其暁自御帳内投出御封書披見即金像御自
筆
状也成希代不思議之思即執進王城畢仍王公卿相成未曾有
之思
奉随喜讃嘆其御返状皆以善光寺宝蔵在之云々彼此献札
返報時代不分明也但四十八歳十月十四日云々」5ウ
善光寺縁起云推古天皇即位三十年壬午聖徳太子信濃国金仏
像御奉□
御書状于時阿弥陀如来自筆御返報云々又以二十句碑文奉
献金像
同天皇治廿八年十月十四日云々又別時念仏奉札同廿九年辛巳
二月十四日定

又有伝文云上宮太子以書状進達金仏御宝前惣第三度也云々

上宮太子三妃事一小野妹子大臣女恩智姫　二蘇我大臣女川上姫

三膳姫也彼恩智姫者最愛第一妃利生之大士慈悲之大聖也形者

五障婦女之身心者一子之大慈悲太子契厚生々定恵夫婦也興法利物討辞通后妃也故蜜謂恩智妃云吾化縁将尽死葬□

□」6オ

汝如何ソヤ恩智姫聞其言涕泣悲涙悶絶躃地再三而蘇息泣々

□〔奏宣〕□

妾必待大聖逝日入一仏生之花台終以太子御入滅抱其死骸一流涕

拭涙惜名残契後会於浄刹期値遇於西方端坐合掌合両眼

無言語遷化以後経七日結偈云　一切諸法　本来常住　愚夫顚倒

生死流転　大聖救世　慈悲方便　機興即生　縁謝離滅

非生現生

我身大覚　化縁能尽　終帰本覚　仰願同生　上宮浄土云々

誦此偈頌忽然向西方飛去王公卿相大驚仰礼即入紫雲之中

残異

香宮中更不知行付所其後伊与国司差専使奏状申聞去二月廿八日」6ウ

夜半虚空調音楽大地震動然間万民成希代之思待明旦見保津

御岐天女即天降薫異香放光明無言断食送五七日終成仙人霊

瑞非一神変利物誠以掲焉以此由奏聞推古天皇大随喜帰依渇仰

大臣卿相合掌敬礼　又国内貴賤参集備山海之珍物奉祝祭

故有勅令称大通仙宮是以帰依渇仰之類忽成二世之願参宿礼

奠之輩必生安楽之土文彼妃死骸胫脣頷并翡翠髪玉簪皆以

于今奉納神庫　又有近辺寺塔号須仰寺也

彼河上妃者太子御遷化五七日之夕部命従女沐浴潔済着清

□□※7」7オ
面向西方合掌端坐無言念仏即以偈頌日我身大悲地蔵菩薩
今現三従五障身　皆為利生即示現　慈悲衆生弘正法
化縁亦尽帰本覚　必往上宮　安養界　此偈文三返念誦終
以薨逝面貞如眠亦如咲其身甚香而満異香宮中照光明内外
即天王臨幸運敬礼之儀卿相参集致渇仰之誠奇瑞多端存
日言語没後神変希代之往生現身正覚之臨終也即以彼死骸
平郡山本陵墓仁奉葬埋之也云々彼姫御墓者相当法隆寺北
山本程也云々彼姫御墓者相当※8　又恩智妃御墓者即伊与
箸何寺也」7ウ
一間人穴太部皇女者推古天王御即位廿九年歳次辛巳十二月廿
一日酉時孔部間
人公主母王夢逝玉ヌ于時太子臨宮内殿涕涙悲哀良久歎息
拭涙
喚叫而微言昔蘭少ニシテ而喪母問母形於里人不耐悲哀母形
刻慕
亡母之質今愚臣長別母難忍悲涙母容写何見喪母之形
悲哉痛哉如何玉泉何所一去更不帰玄台何方再会無期如此
再三
悲哀悶絶良久而今有仰群臣以死骸入金棺奉埋河内国科長
御
墓即以表弥陀三尊位云々　或日記云間人皇女崩御之間
上宮太子
悲母※9哀叫喚而初者奉葬大和国城上郡間人墓然太子御入
□」8オ
後経七年任太子御遺詔奉改葬太子御廟表弥陀如来□
尊之位也吼アナ太部間人臨終時偈頌文　昔在霊山名法花経
今在西方名弥陀尊　為利生故示現女身　産生法王還帰西
方文
皇女臨崩逝之時面向西方端坐合掌正念安住放光薫香虚空
音楽普聞宮中香花広薫凡在生之行化薨後之奇瑞寔以
希代也応化方便大聖利益誰成疑殆也
一推古天皇者三世覚王之太子四徳法宮之儲君也任往昔宿
願為流
布一乗妙法仮現皇后之身為三十四代帝王与上宮法王相議
下綸言□※10」8ウ

万郊弘仏教於八□終造立四十六ケ之伽藍化度一千三百之
僧尼凡
其行化利生方便年々興行時々奇瑞不違羅縷一々徳行難述
（マヽ）
韓
墨者哉　元興寺縁起文云等由羅宮天下豊御炊屋姫天皇
推古女帝
御生年一百歳正月元日厩戸豊聡耳豊子聖徳太子奉詔令記録元
興寺并諸寺本縁其本記日　大和国城上郡城嶋金剌宮治天
下天津
国押開広庭天皇即位第七年歳次丙戌午（イ本刀）十二月十二日以百済国
斉明天皇
御使西部姫氏等奉送奏悉達太子影像并灌仏金器一具亦諸
聖教其詔日正聞仏法者既世間無上法也貴国臣専可令□□
者」9オ
其時天王告諸臣等宣此異朝明王於送渡奇人形等須信敬□※11
不可用汝等能々可計奏也其時物部尾輿大連并中臣勝海連
等
計申言我朝是照霊姫天神并天社国社一百八十神自初奉祝
祭
于今無怠奉閣天○地神達何敬他国人形乎更以不可仰崇計申
其中
蘇我大臣稲目独申他国王臣為貴我等国亦為貴可宣奏申其
儀
可奉安置何所乎大臣又申太大王古言空閑宮也須安置彼所
也
彼太大王ト申者推古天王未付帝位時御名也但此時金仏并灌仏器等者奉安置本元興寺
其比国中発疾疫人民多死亡因茲物部大連等強依誤申終奉
返」9ウ
捨本難波浦畢雖然疫癘更不平除弥以発動而死人塞路辺病
人
満宮室此稲目大臣等奏言我朝未崇仏法之前疾疫更発以如
斯
更以不可依仏法之由訴申其比又自百済国差送使臣西部喜
氏
等相当欽明天皇即位第十三年歳次壬申十月十三日奉送渡善光
寺

金仏弥陀三尊并仏教等百済国送使人等侍十市郡石根堺河
奏聞
明王之詔旨仍以巨勢并大伴目子連等令対問其国使臣請迎
仏僧
経教於朝庭召集群臣等安否相尋給処朝議紛紜而無叙信依
讒臣申請焼払仏像経教或埋隠土泥底又流捨難波西海其□
□」10オ
於金刺宮之上黒雲忽引覆自雲中赤黒大鬼王出現高声□□※12
仏法微妙値遇亦難若信若敬悉地円満仏法破損寿福速滅王
臣愚迷
仏経焼失天王官位即減七日必定崩滅臣卿同亡　天王聞召
鬼王奇言
忽以御悩因之終崩御　又敏達天皇治天下第八年己亥冬十月
自
新羅国送渡釈迦尊三尊其時安否異論以如斯　欽明治天下
即位
七年丙子十二月十二日送献悉達太子像灌仏器等同治第十三
年壬申十

月十三日閻浮檀金弥陀三尊与敏達天皇治天下即位八年己亥
尺迦三
尊送使臣各日皆以不審多端是以維摩会縁起文云北野天神御自筆文」10ウ
至磯城嶋金刺宮御宇欽明天皇即位冬十月百済国聖明王仏
像
幾許種来献于我聖朝議紛紜彼此成異論云々奉捨置彼仏経
於難波浦上宮太子御誕生々長後奏聞于天皇造立仏殿有仰
崇
之此疾疫如昔更起物部守屋中臣勝海彼等依讒申仏僧経巻
皆以
焼失或以流失依彼逆罪王臣悉以亡云々一小野妹子大臣遣
唐記
敬伝奏西皇帝竊風聞日域上宮太子者南岳大師之後身救世
菩薩ホ
之変作云々故青宮華之下広興行三宝東囲月之前普利益四
生
是以請定彼先身修行之法花経等製作其義疏須詔発二諦救
□」11オ

四生之旨依懇美以長官大礼小野相公副使小礼吉備宿祢遣
西
岳擬遂聖奏者早垂慈察任旧法為蒙天詔驚明王之高
聞委曲難尽小野相公等至具述懐云々

仲夏上旬扶桑国朝庭牒

百済国聖明皇帝寛旅下衙

仏子上宮牒南岳三綱禅室衡

早任南岳大師遺詔記文須採小野妹子臣等
金字法花経
仏肉舎利并七生相承本尊救世菩薩等事」11ウ
右考先身愚臣為利生率衡山之禅室暫生日域之王宮任其弘
誓広弘月氏之妙法普利東海之利生抑隔生之後猶以難忘貴
岳之仏法興廃如何不審々々而会遙絶慕涙未乾凉燠早転
契日将至再会何日哉心事察之故牒早開般若台宝庫捜取
法花経并。仏舎利等須授妹子大臣等也将又就便次調送三具
法服
等為永世之形見可令配納貴山三綱者也
心懐難述小野臣等至述情不宣謹言

仲夏上旬　仏子上宮

衡山寺三綱禅室衙」12オ
紫微宮政所宣般若台三綱等所
早任南岳大師遺札開台閣宝庫捜取大師持誦
法花経等須
授度日本国大使小野相公等事
右今月三日鳳詔偈昔南岳大師遷化之後任其宿願暫感日域
之
生広興仏事偏救群生故須請迎上宮法王之先身大師修行之
法花経等之旨依令美日本国朝庭彼国王宣并上宮王令符如
斯
早押開寺庫捜取妙経等可令調伝小野相公等之旨天気如件

首秋上旬　左相府広明」12ウ

衡山寺三綱寺所衙
謹請　両朝綸綍事
先師大和尚修行法花経仏舎利等状
右任鳳詔三綱等開寺蔵捜取彼妙経等送以授伝日本国大使
妹

子臣等既畢以此旨可令執達状如件

孟秋上旬　　衡山寺三綱等状

進上　紫闕中台政所㕝

跪請　日本国王宣并上宮法王令符事」13オ

右謹賜宣札先面東三拝具以披覧抑大師遷化之坐禅床

法燈之光忽消清談莚之上教訓之音永絶書案塵積数巻之

章疏徒朽紙窓月冷論匠空廃是以常礼墳墓而拭涙古

薨之花□不語又恋遺音閟袂墓林之鳥独怨故日夕悲寤

寐歎春行夏来不図記暦忽来今賜聖札積年之愁眉連休

三老比丘等所期也抑幸預三公之詔札剰賜三具之法服面

東咒願跪拝納正了此咒願言有即任官符宣押開南岳宝蔵

捜取金字妙経并仏舎利等慥以令授伝大礼小野妹子大臣等

注文別紙載」13ウ

仍難述愚札并以大使口状不具謹言

上宮王院㕝　中呂下旬　南山三綱等状

敬返奏東海皇帝

右去歳仲夏宣命即勅有司仰衡山三綱採取思和尚誦持法花

経并

仏肉舎利等慥以授度小野妹子大臣等之由三綱等請返札如

此抑

大師遷化之後五唐燈将消三学之論談漸廃四衆行化空尽三

宝之

紹隆永絶然今承東海来化之聞成大師再会之思棒救世変作

之

札当悲涙恋慕之胸唯指日出之方方札大師隆化之東将又□

□」14オ

速退三宝終興併以王臣等喜悦何事如之哉　依難尽天詔不

具□

日本国金闕㕝　仲呂下旬　百済国紫闥牒

右此時自我朝被送大唐国珍宝等注文并天皇宣旨太子令子

又自

百済明王返報等皆以相承之処為鼠虫等被喰損少々文字失

了

然間少々有相違之字欤後以他本令授伝也

一法満寺縁起云敏達天皇即位元年壬辰正月元日於厩戸上宮

聖徳

太子御誕生其時老女自天々下盛桶水清水放妃口中抱太子
直居
寝殿内忽然入白雲中是聖徳変作也云々又云達摩大師之所
化也」14ウ
太子御沐浴之時有三井所謂千歳井天医方也赤染井養者方也春
井辰己福□方也
春井水者夏極冷如氷也冬如温残二井者常如温也云々
于今現在眼前也御産衣白衣又赤色云々同寺西塔銘記云太子五人乳母又
有十二人
玉照左乳母大連女王安姫右乳母妹子女月益姫伊津岐乳母蘇我大臣女日益姫守乳母近江臣女唐花姫
沐浴乳母川勝女五人者分明也
残七人略欤　二歳二月十五日平旦称何仏哉　本記云面向
東方
称南無仏尺尊向東面放光説法花発心発心修行修因感果之
道理也
太子問以如斯仏法伝通記文云初唱三帰依仏後称薬師仏名
終□
向西唱尺迦尊之名号　其手掌舎利何粒唯一粒也是舎利者
□□」15オ
御眼也自過去諸仏二至当代尺尊一其右眼必伝日本国更以無
□
故我朝号日域天竺有左御眼号月氏云々　日本記云我朝根
元者照
霊姫天照大神為日輪之形二天降朝日嶽終以現神徳因之称
日本国
号日域云々　定林寺尺迦本記云二歳南無仏之時仏肉舎利
三粒也云々
是□※14一粒者　正南無仏ノ時御舎利也安置法隆寺也今二粒
者妹子自衡山請
来也必定之也三歳三月三日桃花松葉御遊覧何所哉　今厩
戸宮辰巳
小槻宮乃後苑桃御園其跡也是我朝桃木出来始在所也西王
母
将来殖生奉祝崇神天皇是初也云々　四歳御時太子独進請
答之」15ウ
引孝行伝曰天有日月星照物無隠地在堅牢地神記失一無余

児背
天命隠何所仰望請答於膚須為学文之始也　欽明天皇即位
十五年甲戌八月十二日五経博士并医師博士等来聖徳太子八
月以博士
学号御手習又学王右軍書以此文書力顕文武之徳終伏逆軍
興
仏法件文書者自龍宮奉献黄帝二王右軍書也太子十歳辛丑二
月
千嶋蝦夷寇於奥州経年終責入三輪山辺云々、奇特伝云太子
取一盤石投上天良久落地蝦夷等恐怖振舌拍手進罰文還本
国此時蝦夷大将鬼師綾糠嶋廻早風足早以上五人也」16オ
推古天皇崩御端坐合掌唱偈文
三世恒利諸衆生　普賢大士即善巧　故現日域女帝王　興
隆仏法帰本覚此文三反□□寂滅異香放光※15
崇峻天王最後頌文云我身本性大尺迦　慈愛衆生即王位
示現世間無道理
終帰霊山寂光土　敏達天皇結偈文云　我身即是東土主
利生方便
日本王　隆伏逆臣弘正法　宿願満足　還本土　此要偈三
返七返唱入寂滅云々
用明天皇　最後遺詔文　一切世間本空寂　空理即有流転
性　示悟本源
利生故　仮現人王化迷類云々　欽明天皇三歳御時依詔問
頌文
衆生有苦　三称我名　不住救者　不取正覚」16ウ
真鳥大臣女真鳥姫産子伽耶三歳同時偈文　見我身者　発
菩提心
聴我説者　得大智恵　知我身者　即身成仏　聖徳太子二
歳二月初語言
我身大聖　仮現嬰児　為弘仏教　仰願王臣　一心興法
広済群生　終果
本誓同此唱文　為衆開法蔵　広施功徳宝　当於大衆中　説法師
子吼文
太子入滅時文　十方世尊　智恵無量　常令世尊　知我心
行　仮令身上
諸苦毒中　我行精進　忍終不悔　膳姫最後頌文

我誓挙足　動三千界　断衆生業　而証菩提　我本□〔因〕地
以念仏心
入無生忍　今於世界　摂念仏人　帰於浄土」17オ
太子遣守屋牒文　不受我教　将為大害　即使思惟　設諸
方便
守屋返牒文　濁劫悪世中　□有諸恐怖　悪鬼入其身　罵
詈毀辱□
我等敬信仏　当着忍辱鎧文　守屋誅戮時川勝唱文
我今安慰汝　勿得懐疑懼　仏無不実語　智恵不可量　我
願既満　衆望且足
守屋最後文　如我昔所願　今者已満足　化一切衆生　皆
令入仏道　如刀杖
瓦石　念仏故応忍　我千万億土　現浄堅固身　五智御廟
者
辰己角推古天皇普賢菩薩　未申角敏達天皇薬師如来　戌亥角上宮太子救世観音表三尊位
双刀角孝徳天皇大日如来　中央用明天皇宝生尊」※16 17ウ
推古天王乃御廟初広瀬郡広瀬寺青御陵是也而依御遺詔奉
改葬河内国石川郡東条科長墓　用明天皇乃御墓初者
十市郡池上御陵也同奉改葬河内国石河東条畢　崇峻天皇
御廟十市郡倉橋下今上宮陵即是也朝墓※17常随卿相八人同所
御
廟現在也　摩呂古親王御廟葛下郡当麻呂古嶽也　妹子大
臣
慕（マヽ）宇陀郡□〔排カ〕原墓也　蘇我大臣墓葛上郡有今来野名大陵」
是号ハ
小陵ニ入鹿臣墓也　日本記云蘇我大臣墓今蘇我也云々
秦川勝連墓丹波国小野西田村墓是也　守屋逆臣河内国」
18オ
河殖松□※18戌亥墓也　恩智姫御廟者伊与国保通（ホツノ）御岐是也
河上姫廟者平郡山本北陵墓是也　日羅聖人墓幡磨国武庫
山西尾墓也
調使丸墓大和平郡龍田山辺立野坂也彼丸者太子十三歳初
為内舎人
其時丸者生年十八也天智天皇即位二年癸亥二月十五日出家
八十四率去云々
宮池鍛治師太子十五歳始為舎人依好殺生太子無御寵悔過

出家住法

隆寺太子薨後同五日発願無言断食自死其基(ママ)片岡下在之

一欽明天皇陵高市郡檜隈御廟不思議在之　舒明天皇

陵城上郡押坂墓也又奉改葬河内国石河郡在之御廟於内外

常現奇特」18ウ

斎明天皇陵高市郡越智大握(ヲヽトマ)間山陵是也　天智天皇陵山城

国

宇智郡山在奇特云々　天武天皇陵(ハ)即内裏清御原宮高市郡

橘寺西也　一八人童子問難言

第一箇嶋尊日白木不動坐万杵上愛染内居随物開問依用上下利衆生人躰辺如何哉答云人頤是也　第池(マヽ)辺王子日

父者二度不合母者再会六内

篇如何答云人脣也　第三萱野王子日非輪王又非声聞辟支仏而転法輪而如仏入涅槃如何答云垸瓦也　第四小槻丸

日一二訓読者九頭一尾如

大蛇而文字也世間最要知物数如何乎答一二三也　第五葛城尊日日月早廻土毛兎烏波不立去合ハ明々不合光々付字篇其字如何答是明文字

也

第六遠箭尊日六郡比丘者左右居シテ音声計行テ茸形裸僧其住在人躰辺何所哉答即左右耳也　第七竹田王子

日八十一老人常立更不居九々

答蔓草花華也※19　第八釼手尊日青蓮□堂内ニ仏坐有光明即明々無光明穴暗々人躰辺何所乎答両眼也云々　右於此八人

王」19オ

異説雖万枢依一伝秘書記之此外有口伝秘決以千金無左右

不可有口伝一云々

一穴太部皇女太子抱給持言　念念念念念念念　露露露露

露露露毎日七返

此七念訓云思曾兎(ソト)於毛非思尾裳非野思影者思志人(ノコヽロサシ)志也

又七漏訓日母連曾伏(セ)志持母連尓母連入天母連々々天古曾

故古尓母連来(クレ)文

又云七念七漏(ノ)次念々法師(仁)於通気天漏々法師(仁)引世無漏(コ)々法※20

師(ニ)縄

付天念々法師(仁)引(セン)是又南岳念禅比丘事也漏々法師七生

通名也

右此七念者四弘上別願救世観音無仏世界度衆生之七生乃

他也云々

七漏者応其別力生々念力世々智力相応無断絶而感倭国之

生弘日域」19ウ

之仏法故云々　彼禅師自初生一以降毎生登衡山一修道行化

号日念禅一念々

法師以如此子細七念七漏念々法師等句義也云々

一山田大臣嫡男入鹿逆臣被刎首最後謡言

我身即是大明王　仮現日域大逆臣　実助王法度群生　今日帰入阿字門

唱此文昔者舞虚空中（ママ）差乾方遠飛入白雲終落今蘇我野森中云々

一上宮王女三人王子御生母記文云

河上妃所生—大兄王（薬王菩薩）—桑田姫（薬上菩薩）—老蘇王（普賢菩薩）—財手王（陀羅尼菩薩）—茨田王（徳蔵菩薩）子—馬屋

女王（金剛蔵菩薩）—日置王子（衆宝菩薩）—片岡女王（月光菩薩）—遠見王子（金蔵菩薩）（クリ）—春米王（金剛蔵王菩薩）—礒部女王（虚空蔵菩薩）—白髪部

恩智姫産生—菅平女王（法自在菩薩）—殖栗王（金剛蔵王菩薩）—春米王（虚空蔵菩薩）—礒部女王—白髪部

三枝末呂古王（光明王菩薩）—池上部姫（※22 □自在王菩薩）

膳手姫産児—近代女王（師子吼菩薩）—三枝王子（宝蔵菩薩）—高嶋王（日照菩薩）—山影王子（大白象王菩薩）

乙姫女王（白象王菩薩）—尾張王（大威徳蔵菩薩）—王三嶋女王（※23 無辺身菩薩）

上宮法王三人妃御産王子男女二十三人也

御孫王子達　山背大兄王（薬王菩薩）—難波王（文殊師利）—末呂女王（弥勒菩薩）—弓削王（日光菩薩）—雲見王子（月光菩薩）—佐保女王（地蔵菩薩）—

御母者来目王子女山川姫—桑田姫（薬上菩薩）遠箭王子妃也　桑薗王（薬師仏）—八木姫（宝勝菩薩）—

乙益女王（千手観音）—勝仲王（十一面観音）　老蘇王子（普賢菩薩）—生溱王（馬頭観音）—近江女（准胝観音）—栗本主（金剛手菩薩）—」20ウ

石山王（宝月菩薩）—菅平女王（法自在菩薩竹田王子姫也）—香子山王（栴檀香仏）—石川王（摩利支天）　武市王（多聞天）　殖栗王子（金剛蔵菩薩）

王子以大悲為宗以利生為先　不帯妻妃常上宮王不退浄行　春米女王（金剛菩薩）道心堅固不断法花一乗修行之間不御王子也　近代女王（師子吼菩薩）—坂田王（等地菩薩）子—春井姫（妙菩音菩薩）

財平王（陀羅尼菩薩妃市辺姫也）—山田姫（大日如来）—奥山王（愛染王）—三吉野王（不動明王）　礒部女王（虚空蔵菩薩）不犯一生不犯之間無王子　不婚

茨田王子（徳蔵菩薩妃乙女姫）—甲可王（無尽意菩薩）—佐々王（増長天）—三枝王子（宝蔵菩薩妃小辺姫）—大慈女（聖観音）—

大悲麻呂（持国天）—大智王（光日天）

三枝末呂古王（光明王菩薩妃田中姫王子一人モ不坐）　馬屋女王（鳥取王子妃）—妙音姫（花徳菩薩）—妙法姫（法童菩薩）—山本王（法王子菩薩）

白髪王子（※24 花□王菩薩妃安倍姫）—長岡王（宮毗羅大将）—高松女（伐折羅大将）—深高王（遠企羅大将）　日置王子（衆宝王菩薩妃中尾姫）—石井丸（安底羅大将）—

須弥羅大将　珊底羅大将
野口王—市辺女王　月光王菩薩妃押坂姫
片岡女王　御子無之一生不犯
女王也
日照王菩薩　自五歳発心修行更以世間
高嶋王　振舞無之間無妻子云々
三昧王菩薩妃玉河姫　因達羅大将　波夷羅
遠見王—早日王—行方
大将
王　池□※25自在王菩薩朝香王妃
上部姫—」21オ
摩虎羅大将　真達羅大将　招社羅大将
河内王—山本王—乙足女王
大白象王菩薩
山影王子一生好閑居住深山不持妻妃仍無王子也
白象王菩薩手嶋松本王姫　毗羯羅大将
乙姫女王—小野姫—宇陀野王
導師菩薩
大威徳王菩薩妃小野姫　宿王花菩薩
尾張王—長岡王—石井丸　宿王花智菩薩　金剛手菩薩
垂水王
無辺身菩薩妃山背姫　無量身菩薩　常精進菩薩　不休息菩薩
三嶋女王—早飛王—田中姫—水辺王
聖徳法王廿三人王子達各々所生男女儲君以上四十八人也凡
此廿人王三歟仁
加観自在大勢至称廿五菩薩廿三王子各所生四十八大菩薩
合数七十一躰之
大聖也此王公卿相都集二百五十三人皆以有配躰所表
一伊与国穂津美ホツミ岐サキ仙宮者蘇我大臣御女河上妃化現大通仙
宮也即□」21ウ
其御骨舎利等也　上彼妹子大臣者恩智姫也云々
一太子於片岡山賜達摩詠歌云　五唐三韓大聖文殊片域無
仏法国□
道四生無菩提資粮三界五有無常住大慈大悲抜苦与楽無覚
母此意詠也
尸那照耶片岡山尓飯仁飢天臥其旅人可怜無祖　私記云尸
那者五唐三
韓乃大師達摩和尚彼五台出聖霊仏跡入東海片域之心也
照耶者
和尚大聖能化尺尊九代祖師十方三世仏菩薩能生智母也然
照生死長夜耀
菩提覚月之義也　片岡者無仏世界　山尓者有為奥山無常
堺也
飯仁飢者我等衆生者五道暗路迷出無智恵之資粮三界六
趣」22オ
飢臥也　臥旅人者我等衆生六道四生之旅人也仏菩薩計
□
覚常住乃家住也云々　可怜無母者達母来化乃昔能化乃大
聖モ不坐
無所憑也　伊加流伽耶冨能小川乃絶波古曾我教君御名者

忘目

娑婆世界流浪堺菩提智生死幽々此死生彼無窮過去教化示道衡山六生利生各別

私記云伊加流伽耶者　娑婆世界常没流転之義又太子過去久遠劫班鳩生経五□

生其心也　富小川者菩提心智恵之義也　小川者死此生彼無　極於保□

君者過去教化示道乃心御名忘目者大唐衡山六生修行内第六生乃時利□

方便問答心中也何忘其時名哉云々

注

（注1）「薩」にミセケチを施す。（注2）「者」にミセケチを施す。（注3）旁「令」を残し虫損。「於」字か。（注4）「書」にミセケチを施し、右傍に「由」。（注5）「已」か。（注6）「献」か。（注7）「浄衣」か。（注8）「彼姫……相当」にミセケチを施す。（注9）「母」にミセケチを施す。（注10）旁「令」残し、虫損。「於」か。（注11）右半ば虫損、「哉」か。（注12）旁「局」残し虫損。（注13）「不」にミセケチを施す。「不」字は重書、下字不読。（注14）「又」か。（注15）下半ば虫損、「唱」か。（注16）「尊」字重書す。下字不読。（注17）「墓」にミセケチを施し、右傍に「慕」。（注18）三画程書きかけて、ミセケチを施す。（注19）「華」字、重書す。右傍に「花」。（注20）「居」字の上ニ「漏」字重書す。（注21）「王」字にミセケチを施し、右傍に「三」。（注22・25）「観」か。（注23）「王」字右傍に見セケチ。（注24）「厳」か。

○上宮太子御遺言記注

○大鳥部父松子撰

○太子廿五歳丙辰春三月八日妹子大臣／

○太子御前蹲踞敬白宝塔金堂当極／楽土東門中心之御意趣知三以二レ何一正有二／西方浄土一唱二阿弥陀名号一示三可二生二彼土一／由二此文一其意異　争知二深意一／

○太子告妹子一向二西方心十万億仏土□レ向／西方一心□二

□□池蓮花開敷ニ過ニ此等ニ本源／心当極楽土東門中心此第三句不レ得知一／乃重太子指ニ打妹子額一示ニ深意一爰妹子／得レ之ニ両眼流レ涙一○太子垂ニ随喜之御涙一／

○太子卅五歳丙刀秋八月五日呉徳博士敬白／御舎利拾三粒員数以ニレ何一知ニ深意一／

○太子告ニ呉徳一拾万徳円満義一知ニ如レ此一可レ拝一／真御舎利／

太子卅六歳丁卯七月□／金銅救世菩薩左足踏ニ開敷蓮華一□／知深意一／

○太子□恵慈ニ蓮華□□／恵慈法師流ニレ涙一／

○太子卅七歳戊辰太娘后問ニ太子一曰不レ得レ拝ニ現／在仏一太子奉レ拝ニ三世諸仏一此宝塔ニ／書置無レ覚一／

○太子曰尤吾随順如レ此一可レ問一静レ意一聞賜／過去云現在云未来云雖ニ言異一但一念／之間無念后大悦知ニ深意一互歓喜御／涙不レ堪云／

○太子卅二歳癸酉十一月十七日百済国□※1問尼／講法堂八間将凡眼七間如何知ニ此深意一／

○太子告ニ善信一離ニ肉眼一真三身顕彼時宛ニ／間一八間云／

○理顕名為観自在尊／

○智顕名為勢至菩薩／

○心顕名為無量寿仏／

○太子卅一歳壬戌百済国阿佐敬白／宝塔第一露盤不ニレ隠ニ○雨露一無レ覚／

○太子告ニ阿佐一彼譬喩表示人皆在ニ法性一／此法性不レ摧ニ擲打一水火不レ忘故宝塔／第一露盤誓手鏤□※2金一表ニ遺法興滅相一／

○恵慈法師日／

○四方皆仏土何以西方一切衆生期ニ往生一候／太子告西文字者點有四方一内納レ八一上戴／一一四角八方皆是帰レ一一故／

○己上七大事畢／

○太子卅歳辛未二月廿五日蘇我大臣拝日／諸仏菩薩奉ニ供養一如何成ニ真供養一／太子告ニ大臣一供養有ニ二種一無レ眼一以ニ才宝一／致ニ供養一召福因／明レ眼一以ニ真蓮花一献レ

仏ニ此時真拝ニ如来ヲ／然而一切満足／

○太子卅六歳丁巳九月十五日／

○推古天皇自ニ八月五日夜ニ至于今日ニ唱ニ念仏ヲ／功徳難ニ思量ニ朕前ニ汝具申ニ承レ勅ヲ／太子曰念仏名号本曰無念此時天皇／知ニ法深意ヲ女帝垂ニ御涙ヲ太子同御前ニ／流ニ御涙ヲ然而後太子重曰今日真往生／

○太子三歳甲午ニ桃花一旦栄物松葉万年々々／

○此御詞卅八歳己卯二月八日／

○奉レ始ニ天皇太娘后ヲ蘇我大臣／○呉徳博士○大鳥部父松子／○妹子大臣○恵慈法師／○百済阿佐○百済善信尼／○太子説ニ彼深意ニ聴聞已々皆知ニ仏法之不可思議ヲ此時太子垂ニ随喜御涙ヲ曰／

有連新志々々々々／

如レ吾皆成／

○太子誓曰此遺言狠不レ可レ伝ニ非器ニ／仮令雖ニ為器量ニ濫不レ可披見ニ敬奉レ累／陛下并御レ世ニ々々レ治ニ天下ニ皇為レ守ニ令ニ／勿ニ世絶ニ／

又曰／

○弘法大師曰雖ニ与ニ千金ニ無レ眼ニ不レ可レ伝ニ／御遺言記ニ不レ然者雖ニ為ニ末代ニ可レ加ニ冥／盧罰ニ可レ秘々々々々／

○上宮太子御遺言記注相承／

○太娘后——○呉徳博士

○上宮太子○蘇我大臣——○妹子大臣

○推古天皇——○大鳥部父松子——○恵慈法師

○押坂大兄皇子弟停王——○舒明天皇

○皇極天皇——○孝徳天皇——○斎明天皇

○天智天皇——○天武天皇——○持統天皇

○文武天皇――○元明天皇――○元正天皇――
○聖武天皇――○光明皇后――○行基菩薩――
○孝嫌天皇――○道鏡比丘――○道如法師――
○道語法師――○法覚法師――○上品舎人親王――
○高野姫天皇　○施基皇子　○光仁天皇――
○慈心法師――○伝教大師――○慈覚大師
　　○智証大師
○弘法大師――○真雅僧正――○源仁――
○聖宝僧正――○源信――○了也――
○慈円僧正――○陵小路二品親王尊性――
　　○阿倍大臣大納言宿奈――○中納言広庭
　　同阿倍（朱）　サウ（朱）〈コレヲリャクスル也
○当寺絵所　阿倍大臣九代之子孫也
ワカテウノサ大臣之ハシメ也推古天皇御時シ○ラヲ／
セメラル、時大将タリ○当寺秘事口伝令ニ／伝受一云々／
此七大事子孫一人令ニ相伝一但依ニレ有ニ御／
器用御所望一以ニ別議一奉レ授ニ彼方一就レ中一／
御往生後者可レ有ニ本所御返一有ニ御誓文一云々／
応永卅年癸卯六月廿九日　書写之畢／
絵所上座覚慶（花押）／

（注1）「学」か。（注2）左傍「□□□□（虫喰）テ」。

*

〔追記〕

(1) 身延文庫には、別に筆跡の相似た〔太子伝〕（釈思託撰「上宮皇太子菩薩伝」を附す）がある。末に「……

南無三国伝灯大導師上宮太子承授／灌頂仏子某敬持三反本云／種々供物等可在之云々面授口決能々守機伝之血脈等別在之／康永二年癸未三月廿四日伝受沙門雄慶」とあり、首欠かと思われる。後欠の可能性のある本書との関わりは、今、俄かに決し難い。

(2) 高野山宝亀院蔵『上宮太子御遺言記註』一軸は見当らぬ由、『水原堯栄全集』十一巻（頁十二）に記す。